

GATE バグネコ 得地でも一撃撃破せり

榛猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とあるアイルーの鎧袖一触で世界のバグと怖れられた、あの獣人種とその後の物語的ななかである

目次

故郷への帰還ニヤ!	1
少女との出会い…ですニヤ!	9
飼いネコになります…ニヤ?	13
緑の服の人達…デスニヤ!	16
逃避行ですニヤ!	19
ジエイタイ遭遇…?ですニヤ!	25
飼い主さん救出…ですニヤ!	29

故郷への帰還ニヤ！

ヤホヤホニヤー！

初めましての方は初めまして、そうでない方はいらっしやいませニヤ！

とあるアイルーの鎧袖一触でお馴染みのアイルーこと、シユラですニヤ。

現在ボクが何をしてるかと言うと……。

「グルルオオオオオオツツ!!」

「待ちなさいーい！逃がさないよー!!」

台詞だけじゃ分かりづらいかもしれないけど^{スファイア}星焰竜さんと^{ルーツ}祖龍さんに追い回されている最中なのですニヤアアアアアアツツ!!

「お、お二人さん？ちよ、ちよつと落ち着きましょうニヤ…」

【ボツ!!!】

【ガガガツ!!!】

ギニヤアアアアアアツツ!!これ話なんて出来る状態じゃございませんニヤアアアツツ!!

と、とにかく今はどうにか逃げきらニヤいと……。

んニヤ？なんニヤ？アレ……。

逃げてる最中に、とても奇妙なモノがボクの視界の隅に入ってきたニヤ。

それは森の中に唐突に出現していたのニヤ。

自然の中にあつて異物でしかないあからさまな人工物ニヤ。

街にだつてこんな辺鄙な建物みたいなものないのニヤ。

近づいてみてようやく正体が解ったそれは……半透明に揺らぐ門……？らしきものだったニヤ。

それを……。

それを目にした時ニヤ。

まるで心臓を鷲掴みにされたような強い衝撃がボクを襲ったニヤ。な、なんなのニヤあれ……。

まるで理解できないニヤ。

理解できない………いったいどうなってるのニヤ？

けど、そんなことはどうでもいい。

どうでも良いのニヤ。

アレ……。

アレが繋がってる先は……先の世界は……。

ボク……いいや、『自分』の故郷ニヤ。

言葉説明できない。けど、なんでか分かるのニヤ。

なぜだか知らないがわかるのニヤ！

感じる……そう、感じるのニヤ。

忘れ難き『自分』の全てがあそこで待ってるのニヤ。

でも、そんなことより今は……。

「生き残るのが先決ニヤアアアアツツ!!」

「逃がさない!!」

【ボツツガガガツ】

ギニヤツ!?金の焰と雷は反則ニヤ……ツ!

もうっ……こうなればイチかバチかニヤ!

「こんなところで死ぬ訳には……いかないニヤアアアアツツ!!」

ボクは激突する勢いで門に触へと突進するニヤ。

けど、予想していた衝撃は一切来ることにはなかったのニヤ。

その代わりに、まるで水中に沈んでいくような感覚が身体全身を覆い、真っ白な光だけが目にとびこんでくる。

その様はまるで、某青タヌキの時を越えるあの空間にそっくりだったのニヤ。

数秒か、それとも数時間経ったのか……。

そんな事を考えながら光の奔流の中を夢中になって飛んでいると、

唐突に閃光が消えた。

そしてボクの目に飛び込んできたのはどこまでも続く青い空、そして白い雲。更には連なり建つ高層ビルの数々。

ボクは歓喜したニヤ……。

目に写るもの、耳に聞こえてくるもの、鼻で感じているもの、肌で感じているもの。どれもこれも、ここが日本なのだとしつかりと伝えてくれる。

帰ってきた……。

ボクは…帰ってこれたのニヤ。あの懐かしい故郷、日本に……。

あまりの喜びに一筋の涙が頬を伝い落ちる。

嬉しい。良かった。助かった。安心した。言葉にならない。この喜び、安堵の気持ちをボクはどう表現すればいいのか分からニヤい……。

ただし、その感動は唐突に覚める。いや、妨げられたといった方が正しいかニヤ？

ボクの目の前で起こっていたのは、そう……

殺戮だったのニヤ。

鎧を着た人達。豚の頭をした怪人。その他諸々のヘンテコな種々雑多な奴ら……。

テロリスト…かニヤ？　けど、それにしたって格好がおかしすぎるニヤ。コスプレテロリストか何かかニヤ？

その誰もが、無抵抗の人達に一方的な暴力を振るっている。な、何をしている…のニヤ？

何をしているのニヤ…？あの人達は……？

目に映る光景を、脳が受け入れるのを拒否している。

いや違う。拒否しているのは『自分』だニヤ。

『ボク』から見れば至極当然な、なんてことはない命のやり取りのはずニヤ。

けれど。あの人達が行っているのは。

生きるため、食らうために命を奪うのではない。

只々、他者の命を踏みにじるための殺し。

眼下で繰り広げられるその行為に、怒りで瞬間的にボクの怒りが爆発する。

「何をしてやがるニヤ!!お前達イイツツ!!」

内に溜め込んだ龍脈を用いて、ボクは身体を鋼クシャルダオラ龍のものへと変異させていく。

「シャルウウウウツツ!!」

一声咆哮を上げ、テロリスト目掛けて突風のブレスをぶつ放してやったニヤ。

ソレを喰らい、まともに回避すらできなかった連中が中に舞ったり同じく舞い上げられた翼龍らしきものに叩き落とされていく。

その様はまるで玩具のように吹き飛んでいく。

バサリと空へと飛び上がり、そのままに今度は風のブレスを撒き散らしながら敵群に突っ込むと、巻き込まれた騎士たちが乗っている馬ごとミンチになった。

逃げ惑う日本の人達を庇うように、ボクは連中の前に立ち塞がり、更にもう一度咆哮する。

これで慌てて逃げ出すならまだ見逃してやるのに、どうやらまだテロリストどもの心は折れてやがらニヤいみたいニヤ。

槍と盾を構えた戦士達が突撃してくるけど、鋼クシャルダオラ龍となったボクには全く無意味ニヤ。

体を勢いよく突進させて風の壁をそのままテロリスト達へと叩き込んでやると、まとめて吹っ飛んでいったニヤ。

ギアアギアアと頭上を小うるさく飛び回っているのが居るなど見たら、小型のガブラスに似た翼龍に乗った騎士達が健気にも攻撃してくる。

けどニヤ?!

『生ける災害』と名高いクシャルダオラとしては、許しがたい不遜な訳なのニヤ。

即の場で飛び上がり、追いかけると、騎士と飛竜は揃って必死の形相で逃げだし始めたニヤ。

逃げるくらいなら止めとけば良いのに…バカな奴らニヤ。

一飛びで追い付くと、その翼龍ごと騎士を噛み潰してやる。

グシヤリと鈍い音と共に口の中に鉄のような血の味が広がって来たのニヤ。

うっ…とてもじゃないけど美味しいとは言えない味ニヤ…。

ベツ…とその場で噛み砕いたモノを吐き出す。

ついで、他の翼龍達にも同じように喰らいついてやったニヤ。

ある程度噛み潰すと、奴らの戦意は最早無いに等しくなっていたようニヤ。

地上いた連中はてんでバラバラで、我先にと散り散りに撤退し始めてた様子だったニヤ。

逃がすと思うのニヤ？ボクを怒らせて助かろうなんてどうしようもない奴らニヤ…。

トドメとばかりに逃げていく奴ら目掛けて渾身の風ブレスをお見舞いしてやるのニヤ！

【ズゴゴゴゴゴゴゴツツ!!】

逃げ惑う奴らを一瞬巻き込みながら巨大な風のブレスが突き進んでいく。

風ブレスが通りすぎて消え失せると、そこには見るも無惨なコスリスト達のだったモノの残骸が散らばっていたのニヤ。

そこまでやってボクはようやく冷静になることが出来たニヤ。

けど、そうなって初めて事の重大さに気が付くのニヤった…。

ヤバイ…ち、ちよつとばかりやり過ぎたかもニヤ…。

本気の欠片くらいしか出してないけど…これはやり過ぎたニヤ…。

すると、どこからか、大きな風切り音が聞こえて来たニヤ。

音のする方向に振り向くと、そこには五機のヘリコプターがこちらに向かってくるのが見えたニヤ。

わー…ヘリだニヤ、なつかしー…

テロリストでも捕まえに来たのかニヤ？。

いや、違いますニヤね。

あの人達はボクを駆除しに来てるのニヤ。

当たり前といえば当たり前かニヤあ……。

ボクみたいな生き物、野放しにしたら大変なことになるのは想像に難しくニヤい。

………

うん、帰ろう。

もう、ここには『自分』の居場所はないし、『ボク』の居場所なんか作れる訳が無いニヤ。

帰ろう……。

ボクのもう一つの故郷へ。

これはきつと明晰夢というやつだったに違いないニヤ。

攻撃何てされたくないし、さつきと帰るニヤ。けど……。

あれ？ 帰り道ってどっちニヤ？

キヨロキヨロと辺りを見回す。

ない…ない…ないっ…ないっ…!?

右を見ても左をボクが入ってきた門らしきモノは見つからない……。

そこでボクはハタと思い出す。

あつ…そういえばボク今変身したまんまだったニヤ。

もしかしたら元の姿じゃないと見られないモノなのかもしれないニヤ。

そう考えて戻ろうとしてふと考える。

このままここで正体バラしちゃったら面倒なことになるようニヤ……。

捕まる可能性も高くニヤるし、ここは一旦一目につかない所まで避難だニヤ！

そう結論付けると、ボクは空高く飛び上がったニヤ。
とりあえず、雲の上にも逃げて、その後で戻るとしますかニヤ。

☆☆☆☆

そんなこんなで難なく雲の上まで逃げて、元に戻って地上に降り
立ったボクだったけど、ふと気になるものを見つけたのニヤ。

「あれって……門……なのニヤ？」

ボクが来たときのもとはまた違った形。古代風……具体的には
ローマの建物のような門が街の中にそびえ立っていたのニヤ。

入ってきた入り口は見つからニヤいし、この姿で歩いてたりしたら
すぐに見つかって面倒なことにニヤるだろうし……

そもそも、この世界には龍脈が全くといって良いほど感じられない
のニヤ……。

これじゃあいつ古龍の力が使えなくなっても不思議じゃ無いニヤ。
ボク、いったいこれからどうすれば良いのニヤ……？

悩みあぐねていると、ふと門の向こうから、不思議な力を感じて、ボ
クは顔を上げた。

不思議な感覚……だけど、何処か懐かしい力の波動……。

ボクはこれをよく知ってる……。

そうニヤ、これは龍脈の波動ニヤ！

感じる先は……門の向こう……かニヤ？

でも……向こうは確実にボクのいた世界じゃないはずニヤ。

逃げていったコスリスト達がああ門の向こうに消えていったのを
見てるからそれは確実ニヤ。

けど、このままってわけにもいかニヤいし……。

うーん……。

.....

ええい、ままよ！ 獣人種シユラ！ いざ出陣ニヤ！！

意を決してボクは門の中へと飛び込んで行くのでしたニヤ。

それが、また厄介ごとに巻き込まれるとも知らずに……。

少女との出会い…ですニャ！

「腹へったのニャ…」

日本で暴れたボクは、門？を潜って数日が経過していたのニャ。

門の先へと辿り着いたボクは何もない緑が生い茂る広大な丘に放り出されたのニャ。

そこからはとにかく生き延びようと全力でその場から離れたのニャ……。

何故逃げたのかって？そりゃ、門が開いたままになっていたからですニャ！

あのまま彼処にいたら確実に向こうから軍隊…というより自衛隊とかが来ると分かってたからさっさとその場を離れたのニャ。

で、離れたのはいいんだけど……。

(グ…ググウウウ)

門を潜ってからこの数日間、一度も何も食べれてないのニャ

……

オマエのその力なら簡単に見つかるだろうって？

それがそうでもないのニャ……

仮にボクが獲物や植物っぽいものを見つけて食べようとする

ニャよ？

(ピタアッ)

「ニャ…ニャぐううう…!!う、動けニャア…ボクの身体ア…!!」

と、まあこんな風に身体が食えることを拒否してくるのニャ。

おかげでここ数日、何も飲まず食わずで数日を過ごしているの

ニャ……。

なんで数日食わずにいて平気なのかニャ？

平気なわけないニャ！龍脈の力でなんとかしてるだけニャ!!

「ああ…大声でしたら余計に腹へったニャ…もうダメニャああ……」

溜め込んだ龍脈も底をついたし、空腹で身体に限界が来たみたいニャ……

ボク、こんなところで死ぬのかニャ……？

そんなことを考えていると、不意にガサガサと何かがこつちに近づいてくる音をボクの耳が捉えたのニャ。

ああ、ボクを食べにきた猛獣かナニかなんだろうニャア……。

もう、意識を保つてるの……も……げんかい……ニャ……。

そこでボクの意識は完全に暗転していくのだったニャ

そんなボクの視界に、ヒトのようなナニカが近づいてくるの瞳に写しながら……。

◆◆◆ (Side Change) ◆◆◆

その子？との出会いは突然だった。

私はレレイ・ラ・レレーナ、賢者カトーの弟子であり、流浪の民『ルルド』だ。

師匠に頼まれて村まで買い出しに行ったその帰りのこと……。

「~~~~ツ……」

呻きのような、だが喋り声にも聞こえるそれを私は聞いた。

猛獣が深手を負って隠れているのだろうか、そうであるなら傷を癒した後に私達や村の人達が襲われるかもしれない。

それならば今のうちに処分しておこうと声のする方向に向かうと、そこには一匹の猫のような獣が伸びていた。

その猫らしき獣は私に気付いてか気づかずか、そのまま気を失ったようだった。

完全に気を失っているようなので近寄ってみると、見たこともない獣だった。

怪我という怪我はないが、身体はやけに痩せ細り、衰弱しているようだった。

見た限り、薄汚れてはいるが、毛並みがかなり立派なので、珍

しいものなのかもしれない……。

あまりの毛並みに少し撫でてみたら驚いた。

とてもサラサラで手触りがよく少しのつもりがこれでは手を離せそうにない。

というかより、もう離れたたくなくなってきそうなほどである。

しかし師匠が許してくれるだろうか：断られたら困る。

かと言ってこの子を捨てていくのも嫌だ。

暫く気絶したその子を撫で練り回して考えた後、結局連れていくことにした。

断られたら何処かで隠れて飼えばいい。

その時の私には、もう離す気など頭からスッポリと抜け落ちていた。

結論から言えば師匠は快く許可してくれた。
寧ろなぜか喜ばれた。

『レイがようやっと女らしく……』

と、涙ぐんでいたが、失礼にも程がある。

私だって可愛いものは可愛いと思うし、ときめきもする。

ただ顔に出にくいだけなのだから……。

ムカついたので師匠には魔法をぶつけておき、とりあえずの子を自身のベッドに寝かしつけ……る前に軽く身体を拭いておく。

汚れたまま寝かせるのはなんだか嫌だった。

本当は治療してあげたいのだが、傷という傷もないので目を覚ますまで待つしかない。

早く目を覚ますと良いのだけど……。

◆◆◆ (side change) ◆◆◆

「……知らない天井ニヤ」

目覚めて第一声にして、それが憐れにもネタになってしまったニヤ……。

いや、こんなのネタに走るしかないじゃないですかニヤ！

オレはある森で気絶した。気絶したと思つて起きたらどつか知らない建物の中のベッドの中だった……。

夢遊病とか寝相だとかそんなもんじゃ断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたニヤ……

え？ふざけてないで早く状況の説明をしろ？

いや、これがふざけずにいられるかニヤ!!なんで森の中だったはずがこんなところで寝てるのニヤ!!!

どういうことかこつちが聞きたいニヤアアア!!

はあ：はあ：なんか精神的に疲れたニヤ……。

とりあえず落ち着こう、落ち着いて考えるニヤ。

そうしてボクが冷静になったその時だった。

「あつ、目が覚めたか？」

そこには銀髪のショートカットに質素なローブのようなものを着た少女……？（そのはずニヤ）が立っているのですたニヤ。

飼いネコになります…ニヤ？

「え、えーっと…」

ボクは困惑していた。この目の前の状況にニヤ……。目が覚めたら知らない部屋の中で、しかも少女…らしきヒトに助けられたようなニヤ。

けど、それ以上に困惑したのは……。

『あのお…ボクを助けてくれたのって、あなたですかニヤ？』

「……?? (コテンツ)」

これニヤよ…ボクという言葉が、全く通じてないのニヤ。目の前の少女らしきヒトは真顔に少し不思議そうな顔を交え多用に小さく首を傾げている。

こ、これは駄目そうニヤ…なら！

「ボク、助けたのはあなたですか…ニヤ？」

「あ、あ…アーユーミーヘルプ？」

未だに忘れていない日本語と、合っているかも分からない英語も話してみる…。けど

「………??？」

こ、これは駄目ニヤ…もうどうしたら良いのニヤア……。

助けてスフィえもん!!!

某未来ロボットの眼鏡のダメダメ少年の如く、あちらで好き勝手生きているだろう星焰竜さんの名を内心で叫ぶのでしたニヤ。

◆◆◆ s i d e c h a n g e ◆◆◆

その子は不思議な獣だった。
用を済ませ、私が様子を見に来ると、その子は目を覚ましていた。

しかし私を見ても警戒どころか怒った様な素振りも見せない。
強いて言うなら突然入ってきた私に多少驚いていると言った程度だろうか。

少しの間その子は私を眺めていると、不意に口を開いた。

「§☆CUN▼C?。」

……?今、何を言った?

聞き慣れない言語だった。唯一不思議そうに首を傾げていたから、何か疑問を投げ掛けたのだろうことだけは辛うじて理解出来たが……

この子達の種族特有の言語なのだろうか……?

私にはニヤーニヤー言ってるようにしか聞こえないが……

「…………ツ！」

私に言葉が通じていない事を理解したのだろう。

二回ほど別の言葉を話していたようだが、全て理解はできなかった。

私が見つからず小首を傾げていると、その子はとても困ったように天井を見上げていた。

しかしすぐに何か別の方法を考え付いたのようで、今度は身振り手振りで何かをやり始めた。

最初に自分を指し、その後に私を指した後、何故か両腕を伸ばして先端を合わせるようにして地面に手を押し付けるような仕草をした後、こちらを見てくる。

最初と二つ目はなんとなく分かったが三つのものはよく分からない

かったので首を傾げてみる。

すると、私に伝わっていないことを理解したのか、別の仕草をやりだした。

今度は理解できるように注意深く見守っていると、その子は不意に倒れ、そのまま自分を指すようにしてから私を見た。

確認をとっているようだったので頷いてみると、次の仕草を始めた。

今度は私を指差した後、何かを運ぶように両腕を上げてその場を軽く歩き始めた。

どうやら、自分をここまで運んできたのは私なのかと聞きたいらしい……。

そうだと言うように頷くと、その子は嬉しそうに顔を輝かせた後、ペコリと頭を下げた。

私はすぐさまそれを止めさせるために身体を起こさせて出来るだけ優しく笑って見せる。

そんな私をみて、苦笑しながら頬を掻いているその子を見て私も少し笑ってしまった。

するとそんなとき……

「グ…ググウウ」

唐突に凄いい音があった。

なにかと思つて探ると、そこには恥ずかしそうに顔を俯けるその子だった。

その様子を見るにどうやら、その子のお腹の音だったらしい……。

「ご飯を作ってくる。少し待っていて」

簡単な仕草とその言葉を告げると、なんとなく察したのか、ニヤクと可愛いらしく鳴いていた。

それを聞いて私はキッチンへと向かうのだった。

というか、ネコつて何を食べるのだろうか……

緑の服の人達…デスニヤ！

ボクがこの世界にきて、少女に飼われるようになってから早数日……。

気がついたら、コダ村に見覚えのある人達が来ていたですニヤ。

少女（名前は知らないニヤ…）の目を盗んでコツソリと、龍脈を探しに外に出かけてみたところ、生前に見覚えのある服装の人達が村の人となにやら話していた。

ちよつと気になったので聞き耳をたてていたら聞こえてきた言語に驚愕したニヤ。

それはボクが生前によく聞いていた日本語だったのですからニヤ。後をつけて聞いていたところ、あの冴えない感じの中年の男性はイタミというらしいことが分かったニヤ。

自衛隊がわざわざこんなところまで出向いてくるなんてニヤア……。

「まさか…ボクの正体がバレて駆除しにきたのかニヤ…？」

それだったらシヤレにならないニヤ！すぐにあの人のところから逃げなくちやニヤ！

…けど、ようやく落ち着けた矢先、また倒れるのも嫌だしニヤア。と、とりあえず、どうして向こうの自衛隊がこっちにきたのか探つて見るニヤ！

そう決めると、ボクは彼らに見つからぬように後をつけていくのでしたニヤ。

◆◆◆ n o w l o a d i n g ◆◆◆

「しっかし、何だったんすかね？あの龍」

「あの龍って…あの渋谷事件の？」

「そうっすよ、何処からともなくいきなり現れたと思ったらテロリスト達を皆殺しにしたんすよ？しかもこっちには見向きもしないでテロリストを潰した後は雲の彼方に消えちまうし…何がしたかったのかワケわかんないすね」

後をつけていく最中に二人の自衛隊の男性が話しているのに耳を傾ける。

「どうやら、ボクが向^{日本}こうで暴れたときの事を話してるみたいだニヤ。」

「アイツのお陰で民間人の被害は確かにかなり少なかったすけど、他の建築物やらの破壊はとんでもない被害になってるんすからね」

「まあ、相手は怪獣だからねえ…こっちのそういう被害は考えてないと思うよ？ほら、某光の巨人が出てくる作品とかがそうじゃない？」

「それはそうっすけどね…こっちとしては溜まったもんじゃないっすよ！ただでさえ福○やら○本やらの復興とかだつてまだまだ人手が足りない状況でこれっすよ！」

「まあまあ、倉田もそんなに怒ってやるなよ…アイツだつて悪気あつた訳じゃないはずだし…それに、犠牲者が少数で済んだんだ。建物なんかは建て直せるけど、人の命は代わりは効かないだろ？そこは感謝するべきなんじゃないかな？」

うげっ…：そういえばそういう被害は想定してなかったニヤ。

前までそんなの気にする必要もなかったしニヤア…。

というか、あれでもかなり手加減してあげたのニヤよ？

ボクがこのまま戦つてたら渋谷？は火の海どころか更地に様変わりしてたのニヤから。

でも、二人の話を聞くに、ボクの正体はバレてないみたいだニヤ。
それならもう用はないから、早々に退散するニヤ！
そう決めて、ボクは少女の家に帰っていった。

帰ったらあの少女が真顔で凄い雰囲気纏っていて滅茶苦茶怒ら
れたニヤ……。

解せぬ……ニヤ

逃避行ですニヤ！

気づけば旦那さんと飼い主（女性だから一応ニヤ）さんが荷造りを始めていたのニヤ。

んニヤ？何を言っているのかさっぱり分からニヤいつて？大丈夫、ボクにも何がなにやらさっぱりニヤ。

今朝方、村の人がなにやら伝えに来たと思つたら、今度はお二人が堰切つたように慌てて荷造りを始めたんだからニヤア……。

まあ、原因はなんとなく分かるニヤ、昨晚に遠くから感じた龍脈を使ったであろう生物の仕業だつてニヤ。

けど、今はその気配も感じないし、お二人もなんだか忙しそうだしニヤア……

とりあえず、荷物運びならボクもお手伝いするニヤ！

◆◆◆ side Change ◆◆◆

コダ村の中心から少しばかり離れた森の中に小さな小さな家が、一軒建っている。

そう、ご存じ異世界から迷い込んだアイルー事シユラを助けたレイイという少女がその師匠と共に暮らしている家だ。

その家の前には馬車が停められている。

荷台には木箱やら、袋やら、紐で結わえられた本やらが、山の如く積み上げられていた。

傍らで草を食んでいる驢馬がその荷馬車を引くとするならちよつと多すぎるんじゃないか？と尋ねたくなる。

それほどまでの荷物量だった。

その山のような荷物を前にして、更に一抱えもあるような本の束をどうやって載せようかと苦心惨憺している者がいる。

年の頃十四五といった感じで貫頭衣を纏ったプラチナブロンドの少女と、二本足で歩き、少女の倍ほどの荷物を両腕で軽々と持った白と茶のシヤムのような見た目の獣だった。

「お師匠。これ以上積み込むのは無理がある」

最早どこをどう工夫しようと、手にした荷物は乗りそうもない。少女はその事実を屋内へと冷静な口調で伝えた。

「レレイ！どうにもならんか？」

窓から顔を出した白い髭に白い髪の老人は『まいったのう』と眉を寄せる。

「コア□の実と、ロクデ梨の種は置いていくのが合理的」

レレイが腐るものではないのだから……と、荷馬車から袋を一つ二つ下ろす。

そして空いたスペースに本の束を載せた。そしてシユラの持つ荷物をどうするかとまた考え込む。

白髪の老人は袋を受け取ると肩を落とした。

「だいたい炎龍の活動期は五十年は先だったはずじゃ。それが何で今更……」

ブツブツ呟く老人を見て、シユラが首を傾げている。どうやら言葉が理解できないらしい。

老人の言う通り、エルフの村が炎龍に襲われて壊滅したという知らせは、瞬く間に村中に走った。

これが普通ならば、着の身着のまま逃げ出さなければならぬところであった。

だが、今回に関しては通報が早かったため、荷物をまとめるだけの時間があつた。その為に村全体が、逃げ出す支度で大騒ぎしているのである。

老人はぶつくさ言いながらも、レレイの下ろした袋を小屋へと戻した。

寝台の下に隠し扉があり、そこにしまい込もうという腹積もりなのである。

その間にレレイは驢馬を引いてきて荷馬車とつないだ。

「師匠も早く乗ってほしい」

「あ？ 儂はお前なんぞに乗つかるような少女趣味でないわいっ！ どうせ乗るならお前の姉のようなボン、キュツ、ボーンの……………」

「……………」

レレイは冷たい視線を老人に向けたまま、おもむろに空気を固めると投げつけた。

空気の固まりといっても、ゴムまりみたいなものだが、次々にぶつけられるとそれなりに痛い。

「これっ！止めんかっ！魔法とは神聖なものじゃ。乱用するものではないのじゃぞ！私利私欲や、己が楽をするために使っていいものではないのじゃって………… やめんか！」

痛がる老人を見てシユラは『ニヤーニヤー』と腹を抱えて笑っている。

そんなシユラを抱きかかえ、レレイは荷馬車に乗り込んで膝に乗つけると老人に言う。

「余裕があると言っても、いつまでもゆっくりしていられるわけではない。早く出発したほうがいい」

「わかった、わかった。そう急かすな………… ホントに冗談の通じん娘じゃのう………… お主も笑うでないわ！」

老人はシユラに一言怒ると杖を片手に、レレイの隣によっこらせと

乗り込む。レレイは冷たい視線を老人に向けたまま語った。

「冗談は、性的なものの場合互いの人間関係を破壊する恐れもある。大人なら弁えて当然」

その言葉に、分かっただか分からずか、シユラがうんうんと頷く。弟子の言葉とペットの仕草に老人は大きなため息を吐いた。

「… 疲れる。年は取りたくないのう」

「客観的事実に反している。師匠はゴキブリよりしぶとい」

それを聞いていたシユラがまたも大笑いを始める。

最早本当に分かっているような態度だ。

「無礼なことを言う弟子じゃのう」

老人はシユラに関してはスルーすることにしたようだ。

先程からレレイの膝の上で笑い転がっているペットに何も言わない。

「これは、幼年期から受けた教育の成果。教育したのは主にお師匠」

それに、とレレイは膝上のシユラを撫でて続ける。

「この子の教育に悪影響」

そう言ってレレイは驢馬の手綱を握り鞭をひと当てした。

驢馬はそれに従って前に進むようにする。ところが荷台の余りの重さからか馬車はピクリとも動かなかった。

「……………」

「…………… オホン。どうやら荷物が多すぎたようじゃのう」

「この事態は予想されていた。構わないから荷物を積みと言ったのは

お師匠」

「……………」

レレイが老人に冷たい視線を送っていると、不意にシユラがレレイの膝元を離れて驢馬の方に走っていった。

そして驢馬に何かを伝えるように鳴くと、驢馬の代わりに馬車を引っ張り始めた。

すると、先程は一一ミリたりとも動かなかった馬車が動き出したではないか。

レレイと老人はその事実に見開く。

まさかその小柄の身体のどこにそんな力があるのか……………。

想像もできないほど軽々とシユラは馬車を引いていく。

だが、ただ引いているだけなので馬車にも限界が来る。

やがて車輪がギシギシと嫌な音を立て始めた。

それを聞こえたのか、シユラも馬車を引く手を止める。

馬車が止まると、レレイが馬車からぴよんと飛び降りた。

チラリと車輪に目をやると、車輪は地面に三分の一程めり込みながら、数メートルほど穴を開けていた。

あの重さで無理矢理引っ張ったからだろう。

これでは車輪が何時壊れてもおかしくない。

「お師匠。馬車から降りるのに手が必要なら言っしてほしい」

「し、心配するでない。儂らにはこれがあるではないか？ただ人のごとく歩く必要はないのじゃよ」

老人が杖を掲げると、レレイは日頃口うるさい師匠の口調を真似て見せた。

「魔法とは神聖なものじゃ。乱用するものではないのじゃぞ。私利私欲や、己が楽をするために使って良いものではないのじゃ……………」

「……あー……」

レイの温度差を感じさせない視線に、老人が動きを見せるまでしばしの時間が必要だった。

やがてなさけなさそうにな表情を張り付けた顔をレイへと向ける。

「す、すまんかった」

「いい。師匠がそういう人だと知っている」

レイとは、そういうことを口にする身も蓋もない娘であった。



魔法を使うことで重量が軽くなれば、荷物山盛りであつてもシユラに力を借りることなく驢馬のみの力で容易に引くことが出来る。

こうしてレイと師匠、そしてペットのシユラを乗せた馬車は、長年住み慣れた家を後にしたのである。

ジエイタイ遭遇…？ですニャ！

ハニャア…：… なんとというか、凄い混み様だニャア…：…。

今現在、ボクは^{飼い主}レイさんの膝の上で目の前に広がる荷馬車の渋滞
を見ているのニャ。

もう見渡す限り馬車、馬車、馬車!!

しかも、かなりの全部の荷物を積んでるからその重さで進むに進めないでいるみたいだニャ。

まあ、ボク達のところも変わらないからヒトの事は言えないけど
ニャア

「……………」

そう言えば、さつきから^{飼い主}レイさんの様子がちよつと変ニャ
ね……………。

無表情なのだけど、どこか村人達を冷めた目で見つめているような
気がするニャ

…………… まあ、それでもボクをモフる手は止まらないのニャケド
ネ……………

そんな飼い主さんの様子に気づいてか、^{旦那}カトーさんが口を開く
ニャ。

「賢い娘よ。誰も彼もが、お前の目には愚かに見えることじやろう
なあ」

そんな旦那さんの言葉に反応して飼い主さんも話し出したニャ

「炎龍出現の急報に、これまでの生活を捨てて逃げ出さなければなら
なくなつた。だけど、避難先での生活を考えれば、持てる限りの物を
持って行きたいと考えるのは、人として当然のことと言える」

「人として当然とは、結局のところ、愚かしいと言うことであろう?」

「……………」

「なんだか飼い主さんがいきなり黙り込んでしまったけど、いったい何の話をしてるのかニヤア……………」

「あ、とりあえず捕捉しておくよ、ボクには二人がなんて会話をしているのかさっぱりわからないのだけどニヤ」

「飼い主さんは相変わらずジツと黙り込んだまま荷車の渋滞を眺めたままニヤ。」

「この先はいつたいたいどうなっているのかね？」

「旦那さんがなにやら進行方向から歩いてきた村人さんに話しかけてるニヤね。何を話してるのかニヤ？」

「村人さんと旦那さんの会話を尻目に渋滞を眺めてたらまた見覚えのある服のヒト達がボク達の横を通り過ぎていくのを見かけたニヤ。」

「避難の支援も仕事の内だろ。とにかく事故を起こした荷車をどけよう！伊丹隊長は村長から出動の要請を引き出してください。戸津は、後続にこの先の渋滞を知らせて、他の道を行くように説明しろ！言葉？身振り手振りでなんとかしろ！黒川は事故現場で怪我人がいないかを確認してくれ」

「うーん、理解出来る言語ってとっても良いものだニヤあ……………」

「つて、事故が渋滞の原因だったのニヤねえ。早くどうにかならないかニヤあ……………」

「そんなことを考えながらボーっとしてたら不意に荷馬車を降りた飼い主さんがボクを抱き抱えられたのニヤ」

「ニヤ……………？いつたいたいどうしたのニヤ？」

「ボクの訳が分からないまま、飼い主さんはボクを抱き抱えたまま渋滞の先頭に向かって歩き出し始めたのニヤ。」

「えーと？飼い主さん？何処に行くのニヤ？」

「…………？」

「ああ、こんな時伝わらない言語がもどかしいニヤああ…………ッ

連れてこられた先は事故現場だったのニヤ。

そこには壊れた荷車に横転した馬、そして撒き散らされた荷物が飛び散っていたニヤ。

その現場に近づいて行こうとする飼い主さん。それに気づいた自衛隊の一人が気づいて声を掛けてくるニヤ

「君。危ないから下がっていて」

「…………？」

自衛隊のヒトの言葉が伝わっているのかいないのか、飼い主さんは事故現場まで行ってしまったのニヤ。

そこでようやく飼い主さんはボクを降ろすと、倒れている女性と少女に気がついて駆け寄っていった。

そのすぐ側では倒れてて暴れている馬がいる。

けど、飼い主さんは気にした様子もなく少女と女性の容態を確認しているみたいニヤ。

ボクも気になって二人に近づいて様子を見てみるニヤ

少女の方は頭を打ったのか、血の気の失せた顔色でぐったりとしてる。母親と思しき女性の方は気を失ってるだけで得に対した怪我もなさそうだニヤ

そんな風に見ていると、不意に声が聞こえてきたのニヤ。

その言葉に振り向くと、そこには見知らぬ村人さんがいたのニヤ
飼い主さんもそれに気づいてなにやらやり取りをしてるニヤ。

その様子を尻目に、ボクは変わらず少女の様子を確認してみるニヤ
これは危ないニヤ…………早く治療しないと…………

…………方法といえば、回復薬を飲ませるか、ボクの龍脈の力で治療力を高めないとだけ…………今のボクは龍脈がスツカラカンだからダメニヤ…………回復薬も材料がないから作れないし…………

詰んだニヤね…………

ボクが悩んでいたら、自衛隊らしき女性のヒトもやってきて少女を診始めたのニヤ。

女性自衛隊のヒトはボクが少女を診ていることに少し驚きつつもサツと容態を確認して誰かに伝えていたニヤ

飼い主さんがそれを興味深そうに見ていたその時だったニヤ。

周りから突然悲鳴が上がったのニヤ。

見るとそこにはパニックを起こした馬が起き上がっており飼い主さんにその蹄を振り下ろそうとしていたのニヤ…………

飼い主さんはそれに気がつくももう遅い…………。

それを見た途端、ボクの身体は瞬時に動いていたのニヤ。

「危ない!!」

そんな日本語が聞こえて来た時にはボクは飼い主さんを抱きしめその場を瞬時に離脱したのニヤ

「……………ッ!?!」

飼い主さんがその無表情の顔を驚きに少し染めてボクを見ているけど今は無視だニヤ

その直後、バンバンバンッ!!と3回ほど懐かしいような懐かしくないような音が響き渡ったのニヤ。

見れば先程の馬がドウツ!と音を立てて倒れ込んでいたニヤ。

よく見ると、額の所に三発ほど穴が穿たれており自衛隊のヒトが打ったのだと言うことが分かったのニヤ

けど、それよりも視線を集めていたのはその自衛隊のヒトよりもボクの方でしたのニヤ…………。

皆さん、なんでボクを見てるのニヤ…………?

飼い主さん救出・・・ですニヤ！

side 三人称

それは、一瞬の出来事だった…………。

頭部を撃ち抜かれた馬が少女を巻き込むように倒れていく。

少女は動かない、否、咄嗟のことに体が動かないのだろうか。このままいけば少女は馬の巨体に押し潰されてその命を落とすだろう。

だが、そこに紛れ込む影があった。

影は少女と巨体の間に割り込むとその場から少女共々、その姿を消した。

ズズンッ！

そんな音を立てて馬が倒れ込む。

しかし件の少女は何事もなかったかのように別の場所にいた。

………… その横にいる獣に抱き抱えられるように…………。

◆◆◆ side change ◆◆◆

俺、伊丹耀司は目を疑っていた。

今しがた目の前で起きた出来事に…………

村からの脱出の為、荷物をまとめ先を急ごうと混み合う村の馬車の行列…………。

その最中、一台の荷馬車が事故を起こしてその対応をしていた時だった…………。

一人のネコ？（のような獣）を抱えた少女が後方より現れ、被害者の容態を見ていたその時だった。

荷馬車を引いていた馬が驚いたまま走り回り、その少女を勢いのまま蹴り飛ばそうと迫っていた。

桑原曹長おやっさんが咄嗟に馬の頭部を撃ち抜いて蹴り飛ばされる事態は免れ

だが、問題はその後だった。

脱力した馬が少女の方に倒れかかってきたのだ。

蹴り飛ばされる危険を避けるため距離を取っていたのが仇となり、
またも少女に危機が迫っていた。

少女目掛けて迫る馬の巨体……しかしその最中、少女と馬の間に一つの影が飛び込むのを俺は目撃した。

そして地面へと倒れ込む絶命した馬の巨体。

だが、その下から赤い血溜まりが出来ることはなかった。

なぜなら、それは少し離れた所でそつと少女を降ろしているネコの姿があったのだから……

特地のネコって、みんなあんな感じなの……??

◆◆◆ side change ◆◆◆

ん……んん？なんだかさつきから、皆さんの視線がやけに気になるのニヤ……。

ボク、何かしたかニヤ？

ただ^飼レイ^主さんを危険から助けたっただけニヤのだけど……

「……▽□◆—♀♀?#」

んん……飼い主さんも何か驚いてるみたいニヤけど、全然何言ってるのか分かんニヤいし……

と、ともかく戻りましょうニヤ!!^{旦那}賢者^{カトー}のところ!!

そういう意味も込めてグイグイと飼い主さんの腕を引っ張ると、思いのほかあつさりと、立ち上がると抱き上げられたので、ホツとため息を吐きながらボクは戻って行くのでしたニヤ。

というか、さつきから自衛隊の皆さんが凄くボクを見てくるのニヤけど……ボク、何かしちやいましたかニヤ？



その後、なんだかんだで動き出した馬車の群れは村を離れ別の場所を進んでいた。

先頭には自衛隊の車がかつ離れずの距離を保ちながらゆっくりと走っている。

ボク達が乗ってる荷車はまだいいけど、他の人達の所は馬車が壊れたり、負傷する人たちが出てきたりと中々進みは悪い……。

それに、前の雨で道がぬかるんだ影響で荷車が溝に引っかかって動けなくなるなんて事もよく見かける……。

その度に自衛隊の方々が出向いてはその手助けをしてるのを見掛けるのニヤ……。

……けど、こんな宛のない旅路、いつまで続けるんだろうかニヤ……。

龍脈の使えないボクじゃあ皆さんを助けてあげることが出来ニヤいし……ここはネコらしく飼い主さんの膝の上で寝てることにしますかニヤ！



……さつきから先頭がやけに騒がしいのニヤ

なんだか、嫌な感じの強い気配を感じるけど、先頭のクルマ辺りからその気配が動くこともないし、気にする必要もなさそうニヤ

飼い主さん達もまだまだ余裕のありそうな様子ニヤし、ボクはまた一眠りさせてもらいますかニヤ

ところで飼い主さん、余り尻尾や髭は触れないでくれませんかニヤ

おつととと… ここで火炎ニヤね、中々の力を感じるニヤ。50
点…。

「……っ！グルツ…」

なんニヤ？もう終わりかニヤ？なら… さつさと……んニヤ？
なんでしよう… ニヤんか飛んで… ってアレまさか、ロケットラ
ンチャーツツ!!!?
ちよっなんで急にそんなもの放っ… んニヤアアアアツ!!